BAKA ROAD バカロード

北米大陸横断レース2

文・坂東良晃

タウトク編集人、1967生まれ。18〜21歳の頃、日本列島徒歩縦断、アフリカ大陸徒歩横断など約1万キロを踏破。男四十にして再びバカ道を歩まんとする、か?

●7月11日　ステージ23
距離／75・5キロ

緊張感のある一日を迎えました。ロッキー山脈越えの最高点2783メートルのパロフレチャド峠がゴール地点です。今日だけで累積標高差2000メートル近くあり、山の奥に入れば入るほど急な登り坂となって極端なペースダウンが予想されるので、前半から飛ばして時間稼ぎします。下り坂はぶっ飛ばし、登り坂ではあえぎながら標高を稼ぎます。

「こんな所では終われない」と心で何度も繰り返します。ぼくの実力ではタイムオーバーの可能性の方が高い。だから無駄なこと考えず必死に走ることだけに集中しました。ここんとこ、走る意味などを考えすぎていささかつまらない心理傾向にありましたが、今日は「走ることに意味などない」とちゃんと実感しました。ただ汗を流して息をあらげて、コンチクショウと前を目指すだけです。誰の役にも立たないことを、自分勝手にやっているだけです。でもせめてひとつくらいは自分の立てた目標をやり遂げたい。どんなブザマな恰好でもいいので、ニューヨークまで自分の脚で行きたい。だからこんな所では終われないんだ。

制限時間まで20分残して峠のてっぺんに着きました。ゴールすると1000マイル（約1600キロ）突破の記念撮影がありました。蟻の歩みのように遅いけど、少しずつ前に進んでいます。

記録／13時間8分

●7月12日　ステージ24
距離／59・9キロ

峠の最高地点から一気に下る一日です。標高2700メートルの峠は雪こそないものの、吐く息は真っ白で、凍える寒さです。ほんの数日前まで灼熱の砂漠であえいでいたのが嘘みたいです。スタートの合図とともに急傾斜の坂を駆け下ります。足に大きな衝撃が来ます。ところがどこも痛くない！　足裏の麻痺や、関節の可動域が減ってしまった状態は変わりませんが、とにかく痛みがないという事実に小躍りしそうになります。いったい何日ぶりなんだろう。

ロッキーの懐に抱かれた深い森林を縫うように走ります。天を衝く垂直の岩壁や、美しい青い湖が次々と現れます。小川のせせらぎ音や小鳥のさえずりが耳に心地よいのは、脚に痛みがないからです。距離が60キロと短いことも手伝って、あっという間に競技時間が終わりました。走ることは本当に楽しい。速く走れなくても、風を切れなくても、走ることは楽しい。

記録／8時間01分

●7月13日　ステージ25
距離／86・3キロ

再び80キロ超えの二連戦です。足のサイズが大きくなりすぎて、通常のシューズに足が入らないため、カッターでシューズの前部を切り裂きました。生爪が剥がれかけている右親指と左小指のあたる部分は入念に穴を開けました。これでずいぶん楽になりました。

スタートから数キロ進んだところで、現在総合2位のパトリック選手（フランス）と並走しました。大柄な選手が多いなか、ぼくよりも小柄な彼ですが、走りの安定度は随一です。独特の腕ふりが特徴のフォームをひそかにマネしていましたが、本人に「あなたのようなランナーにいつかなりたいのでフォームをマネしてます」と告げると、嬉しそうにしてくれました。16社ものスポンサーを確保するプロの超長距離ランナーは、顔は映画俳優みたいだし、立ち振る舞いも気品があって、わが師にしたいです。

ロッキーの山岳地帯を抜け、コースは再び地平線まで360度開けた広大な牧草地帯に突入しました。山越えしてからの変化は、夕方になると巨大な雲が湧き立ち、雷鳴や稲妻が雲のなかで暴れること。遠く彼方の雨雲が、風向きによって、こっちに接近することが分かると、足早になりつつも嵐の到来を待ち望んでいたりもします。涼しくなるのです。ラスト2キロのところで日本人ランナーの越田さんが猛追してきたので、こちらも猛スパートで対応しました。久しぶりにキロ5分のスピードを出して気持ちよかった！

しかし80キロ以上も走ったあげく猛ダッシュとは、大人2人で何やってんでしょう。

記録／13時間19分

●7月14日　ステージ26
距離／88・2キロ

昨日86キロを走り、睡眠時間足らずで寝不足がひどく、スタートから20キロまでは居眠りしながら走りました。ふらふら蛇行している姿をスタッフ車両に乗った主催者ロールさんに目撃され「道路を走りながら眠るなんて何て人！」と目を丸くされました。

最近は距離感覚が鈍くなり、88キロといっても長く感じなくなってきました。淡々と距離を刻んでいくだけです。今頃だけど、超長距離ステージレースの走り方を少しは理解してきました。脚を上にあげず、地面からの反動を使わない。これは怪我防止のため。疲労を蓄積させないためにも、極限まで筋肉を使わない走り方をしています。

今日は終盤で強い通り雨に打たれたんですが、不思議な自然現象が起こりました。ぼくの足元から道路上の進行方向へと500メートルくらい、真っ直ぐな虹ができたんです。地面から50センチくらい浮き上がった高さです。長いこと生きてても、知らないこと、見たことないものだらけだな、と日々思いを強くするばかり。

記録／14時間13分

●7月15日　ステージ27
距離／78・9キロ

急にコース変更が行われ71キロが79キロに延びました。あしたは89キロという過去最長日であり、実質80キロ4連戦となり息つく暇もありません。持参したシューズのソールの厚みがとうに1センチより薄くなっているため、車のタイヤの切れ端をうまく靴底の形に合わせて貼り（シューグーという接着剤で貼り合わせます）、ソールの厚みを一センチかさ上げしました。

ロッキーを越えて気候が変わりました。夏蝉が鳴きはじめました。日本の夏のように湿気のある猛暑で汗が渇きません。足首をふたたび痛めました。最近5日ほど飲まずにすんでいた鎮痛剤で対応しました。痛み止めで怪我をごまかしながら運動すると、最終的にはスポーツマンの選手生命が奪われる、とはいいますが、ぼくはプロスポーツマンでもないし、この大会をやり遂げられたらそんでいいので痛み止めを飲みます。身体に何が起ころうと、ただニューヨークにたどり着きたいだけです。

記録／12時間57分

●7月16日　ステージ28
距離／89・8キロ

80キロの4連戦目は、ほぼ90キロ。気温40度以上の日蔭もない平原を、熱風にさらされ15時間以上走りました。半ばで嘔吐がはじまりました。また熱射病の再来です。サポートクルーの皆さんにお願いして、頭と首に氷を大量に巻き、氷水を全身にぶっかけながら、薄れそうになる意識を保ちました。

朝5時30分にスタートし、ゴールにたどりついたのは夜の9時。ゴールラインの上で大の字に倒れました。自力で歩くことはおろか、しゃべる余力さえ残っていません。4時間ほど寝たらすぐ明日のレースの開始です。精神的には地獄です。まるで救いがありません。もう寝ます。

記録／15時間35分

●7月17日　ステージ29
距離／78・5キロ

疲労困憊して歩くだけで息があがります。強烈な暑さがダメ押しします。もう走れない。どんな頑張って走っても、スーパーで買い物するおばさんくらいの歩行速度しか出ません。脚の筋肉に残された力はなく、何のでっぱりもない平たい道路につまづいて倒れます。ヤケクソです。好きな歌を大声で歌いながら走りました。もう自分の力では何もできはしないんだから。

昨日から新しく運営スタッフに加わったフランス人の女性が、ゴール近くの数キロを自転車で伴走してくれました。「昨日レースを見たけど、なぜあなたは楽しそうに走ってるの？」と尋ねるので、楽しいはずなどないのになぜそんな質問されるんだろ？と思いよく聞くと、どうやらヤケクソで歌を歌っているのが楽しそうに見えたみたいです。それで思いつく限りの洋楽のスタンダードポップスを2人で歌いながら走っていると、スタッフ車両も横づけされて、なぜか主催者ロールさんがビートルズの「イエローサブマリン」を歌いだしました。しばらく合唱してスタッフ車両が去り、いよいよぼくのゴールが迫ってきたら、ゴール付近で待ってくれている人たち皆が「イエローサブマリン」を大合唱しているではありませんか。あー、もうそれ、ぼくのテーマソングでも何でもないんやけど〜、と思いながら歌にあわせて阿波踊りのような振り付けでゴールしました。なんか違う…。ゴールは地元の学校です。なんと図書室を開放し、臨時のレストランと宿泊室ができています。ランナーたちは書棚と書棚の間に寝袋を敷いて夜の準備をはじめます。食事のデザートに手づくりケーキが4種類も出されて感激しました。そろそろアメリカの大味でパサパサなケーキにも慣れてきて、美味しいと感じはじめています。日本に帰って本来に美味しいケーキ食べたら衝撃で死ぬかもしれません。

しかし、アメリカという国は、冒険とかチャレンジへの大きな理解があると思います。学校や公民館、地域の施設まで、僕たちドロドロに汚れた外国人数十人を快く受け入れてくれます。単なる親切ではなく、ぼくたちの挑戦を讃え、頑張れと熱く励ましてくれます。これがアメリカという国と国民の持っている根本的な強さなんだろうな。

記録／12時間45分

●7月18日　ステージ30
距離／83・5キロ

再び80キロ以上。毎日が首の皮一枚でつながっているかいないか。作戦もへったくれもなく、夜明け前から日が沈む頃まで、ひたすら手足を動かし続けるだけ。この辺りは酪農や大規模農園が盛んで、北海道の景色を10倍くらい引き伸ばしてメリハリをなくした感じです。直線道路を時速100キロ以上の猛スピードで農業用の巨大な運搬トレーラーが通り過ぎるたびに、物凄い風圧、空気の塊がぶつかってきます。頭を下げ、帽子を押さえ、吹き飛ばされないよう身構えますが、風に身体ごと持っていかれます。脚に踏ん張るだけの筋力がなくなっているから、簡単に一歩二歩と後ろに下がってしまいます。これを一日に何百回と繰り返して、ずいぶん体力を疲弊させられました。

途中、日本人ランナーの越田さんに追いつくと、何やら奇妙な動きをしています。カニのように横歩きしながらオシッコを放出しているのです。「何ですか、そのテクニックは？」と尋ねると、「この方法なら小便してる間に10メートルは進みます。仮に10回トイレするとしたら100メートル分進んでる。100メートルといえば1分です。関門突破ギリギリの時の1分は大きいよ」とカニ歩き小便しながら教えてくれました。さすが医学者であり大学の研究者です。実際に使える理論と技術こそが本物のインテリジェンスと言えます。

日没近くに着いたゴール地点は小さなホテル。このホテルでは経営者夫婦がゴールするランナーを一人ひとり出迎えてくれたうえ、晩ごはんを用意して待っていてくれました。丸鶏をよく煮込んだスープや、たくさんのサラダ、フルーツ、スイーツ…。無料でわれわれ一団、50人近くにふるまってくれたんです。美味しかった！

記録／14時間29分

●7月19日　ステージ31
距離／51・6キロ

奇跡的に短距離な一日。こんな日は「休養日」と位置づけて、できるだけ体力の消耗を押さえたいって考えます。本来は気楽に走れる距離なのに、昨日までの疲労が取れず、また気温も昼には40度を超え暴力的に暑く、ゼエゼエ言いながら走っていました。すると200メートルくらい前を走っていたフランス人ランナー・フィリップさんが、なぜか道を逆走してきます。一本道なんで道を間違えるはずもないのに。「何があったんですか？」と聞くと、まるで恋人の誕生日に隠し持ったプレゼントを差し出すかのようなポーズで背中から何かを取り出します。差し出されたのは、スターバックスの500ミリリットル入りアイスクリームです。英語のできないフィリップさんですが意図はわかります。なんせ彼にアイスクリームをもらうのは3度目です。灼熱の太陽の下食べるアイスの衝撃的なうまさったら！　しかしフィリップさんはなぜぼくにいつもアイスをくれる？　他のランナーにはあげてないみたいだし。どうも毎朝、毎夕の挨拶の際も握手やハグが必要以上に熱い気がする。大丈夫かな。

今日は地元の高校の体育館で泊めてもらいます。シャワー室にトイレがあるんだけど、大の方もトビラなんてついてないんですね。丸出しでウンコするわけです。ドラッグ対策なんかな？　こんなん中国の公衆トイレで見て以来だ。奥深しアメリカ！

記録／9時間0分

●7月20日　ステージ32
距離／76・4キロ

朝方、走っているとイタリア人ランナーのアレキサンドロに話しかけられた。「ヨシアキという名前の意味は何か」と聞くので、漢字の意味から「グッド・サンシャインという意味だ」と説明し、夜が明けたばかりの地平線に浮かぶオレンジ色の太陽を指さすと、アレキサンドロは「あなたの父上はいい名をあなたに授けた」と微笑みます。顎にたっぷりと髭を湛えキリストのような顔をしているアレキサンドロは、プロの冒険家です。手こぎボートで大平洋や大西洋を単独で横断するなど、陸海で活躍しています。今回もジープ、コダック、オークリーはじめ、多くの大スポンサーの支援を受けています。ぼくが25年前に行った木彫りのカヌーでアフリカのザイール川を500キロ下った話しでしばし盛り上がると「ミスターBANDOなら日本〜米国間の手こぎボート横断が可能だろう、私とともに」などとそっちの世界に誘おうとするので、「ぼくは生きた魚が大きらいだから無理」と断ると残念そうにしていました。

今日も激しい熱波日和。気温は42度。熱風が肌に当たると痛いほどです。ゴールまで28キロの所で、アレキサンドロがサポート車の横で寝込んでいます。「低エネルギー症だ。動けない」。サポートクルーも途方に暮れています。彼は生き残り組8人のうちの1人です。こんな所で終わってはなりません。「制限時間までは余裕がある。ゆっくり行こう。一緒にニューヨークに行こう」と言い、それから5キロくらい引っ張りました。いつもの堂々としたプロ冒険家の表情は消え、ただの青年として必死にもがき苦しむ彼がいました。

ゴール手前10キロほどの所で、前を行くランナーが道端に座り込みました。オランダ人の女性ランナー・ジェニーです。駆け寄ると、意識は混沌としており、ふだんの彼女ではありません。唇のわきには泡を吹いています。典型的な熱中症です。「私は絶対ゴールできる」とうわごとのように、しかし意思の強い口調で繰り返します。ぼくは「君はゴールしなくちゃいけない。これを乗り越えたらもっと強くなる。絶対ゴールしよう」と話し掛けます。ジェニーは何度もうなずき、立ち上がり、よろよろと歩きだします。ゴールまでは大会スタッフがつきそうことになりました。1人走りながら、（何でそこまでしてみんな走るんだろう）と考えると、喉がつまりました。理由はわかっています。何物にも代えられない、自分だけが自分に与えられる価値があるからです。

大学のキャンパスが今日のゴールです。西日が木々やランナーの影を長くする頃、ジェニーの姿が木立の向こうに見えました。

記録／13時間02分

●7月21日　ステージ33
距離／84・2キロ

気がつくと脚のフトモモ周りがすごく細くなっています。サポートクルーの菅原さんの言葉を借りれば「自分を喰う」状態に突入してるんだそうです。体脂肪を消費し尽くし、さらにエネルギー源を必要とする際に、筋肉を運動エネルギーに変えてしまう…つまり筋肉がどんどん痩せていってしまう。痩せ細った脚には、笑うほど力が入りません。スタート直後からドンケツ独走です。少し風が吹くとよろめきます。体重を支える力なく、右に左にふらふら蛇行します。制限時間に間に合うスピードが出ません。今日は84キロの長丁場ですが、20キロあたりから何度も何度も全力疾走を入れ、関門に届くよう粘ります。「粘る」そんなことくらいしか武器がないのです。スピードなく、体力なく、暑さに弱く、坂は登りも下りも遅い。ランナーとして何の取り柄もないぼくには「根性」を源資とする粘りしか切れるカードがないのです。15時間近く粘りに粘って、夕暮れの街にたどり着きました。関門10分前です。ギリギリの攻防でした。フトモモはさらに一回り細くなってしまいました。また自分を喰らってしまったのかな。

今夜は田舎街の消防署のフロアに泊まらせてもらいます。ゴール付近には、地元の主婦の方々が待っていてくれました。かわいい中学生くらいの女の子がミサンガをくれました。彼女らは手料理を大量に作り、差し入れもしてくれました。料理はもちろんですが、ケーキがホントに美味しかったです。宿泊した各地の公共施設では、ときおり食事の提供を受けますが、高い確率でホールケーキが登場します。アメリカの女性はケーキ作りが大好きなんだろうな。

記録／14時間46分

●7月22日　ステージ34
距離／67・6キロ

朝、選手たちの表情にリラックスした雰囲気が浮かんでいます。「今日はショートデイ（短距離日）だ。気楽に行こう！」と声をかけあいます。67キロを短いと感じるのも変なもんですが、選手の間では、80キロ以上がキツい、70キロ台なら普通、60キロ台以下は楽勝という感覚があります。

朝、再びキリスト似の冒険家アレキサンドロと並走する機会がありました。「この大会が終わったら何に挑戦するんだい」と質問すると、すごくおごそかな表情を浮かべ、また十分な「溜め」を作ったうえで「サウスポール」と述べました。サウスポールとは南極点のことです。「ホントに？」と聞き返すと「私はこの毎日の暑さにうんざりしている。寒い場所に行きたいんだ」。彼は徒歩単独での南極点到達を目指している。南極の基地数ヶ所による支援や、そもそもの許可認可についても詳しい。こやつ本気である。「問題は許可取得に必要な莫大なコストだが、クリアできると思う。ミスターBANDOにも可能性はある」と、ギラギラした目でこっちを見るので「ぼくは極端な冷え症なので無理むり！」と逃げました。

今はオクラホマ州内を走ってるんですが、おとといの夜に地元のテレビ局でぼくたちのことがニュース番組で取り上げられたよう。沿道の人たちやすれ違う車のドライバーからすごく声をかけられます。「合衆国横断してるんだって、お前らサイコー！」みたいなノリです。わざわざ引き返して飲み物を手渡してくれたり、カメラやビデオで撮影されたり、やや対応に忙しいですが、地元の理解あっての大会だから、ヨシとしよう。

去年からオクラホマ州は旱魃に苦しんでいて、雨量の少なさは百数十年ぶりだとか。走っている際に通る多くの橋の上から見る川も大半が干上がっていて無残にひび割れた川底をさらしています。当然熱波も狂気じみていて、黒々とした影をアスファルトに描く直射日光には、そのまま自分がまるまる地面に焼き付けられるかと思うほどです。短距離日といっても、灼熱地獄はいちだんと厳しく、ひとつも気楽な場面はなく、へとへとでゴールにたどり着きました。

記録／11時間42分

●7月23日　ステージ35
距離／72・7キロ

若き冒険家アレキサンドロとの本日の会話。

彼は「あなたの生涯の目標とは何か」と問う。

「思いあたることはふたつある。ひとつは自分の足で六大陸を横断すること。だがまだ夢想に過ぎない。困難なユーラシア大陸と南極大陸を実行する能力は今はない」

「もうひとつは？」

「アフリカ中央部の国コンゴの寒村に職業技術を習得できる学校を作ること。ただしこっちも10年20年と続けられる資金のビジョンに欠け、ただの夢レベルだ」

これを聞いたアレキサンドロはかく語りし。

「今は叶わない夢であっても、人は夢を持つことが大切である。このアメリカ横断だって、数年前までは夢に過ぎなかったはずだ。だがわれわれは今こうして途上にいる。豊かな人生とは、叶わない夢を見ることから始まるのだ」

（おいおい、お前、ぼくより10コ以上歳下だろう？）と思う。すると彼は立ち止まり、路上で何かを拾っている。赤銅色の1セント硬貨だ。

「今日はじめて拾ったコインだ。あなたに差し上げよう。ここから始まる何かがあるかもしれない」。

セルジュ・ジラール選手（フランス）が制限時間ギリギリでゴールしました。足の裏に重大な怪我をしているそうです。セルジュは世界初の五大陸横断マラソン完走者であり、また365日間の走破距離の世界記録保持者です。彼がレースからリタイアすることなど想像もつきませんが、危機であることは確かです。

今日はレースがはじまって35日目。つまり全行程70日の半分まで達しました。距離も2500キロを突破しました。レース開始以来はじめて体重計測しました。57キロでした。日本を発つ前が65キロだったので8キロ減少しました。

記録／12時間9分

●7月24日　ステージ36
距離／80・1キロ

小さな峠を登りきった頂上から見た光景は、地平線まで続く一面の深い緑でした。まさにジャングル。この一カ月というもの砂漠や荒野、牧草地ばかり見てきたので、視界を占拠する緑が新鮮です。干上がった荒地から肥沃な大地にステージが変わったってことでしょう。熱されたフライパンの底とか、アスファルトに焼き付けられるだとか、いろんな言葉で暑さを表現してきたけど、比喩にも限界あり。今日は道路の表面のアスファルトが太陽の熱で溶けて、シューズの底にねちゃねちゃへばりつきました。ひどい日焼けで唇やその内側の粘膜がはがれ、血と膿が混じった生肉がむき出しになって痛いです。全身に霧吹きで氷水を一日中吹き付けながら走っています。水が切れて太陽の下そのままいたら数十分で大火傷です。時々冷静になると、正気の沙汰とは思えないことをしています。

レース終盤、脚を怪我しているセルジュ選手（フランス）と前後しました。身体をよじ曲げ、競歩選手のように必死に腕を振り、制限時間に間に合わせようと苦闘する世界記録保持者の姿に胸が震えました。男がいちばんカッコイイのは、見栄えや体裁を取り繕わず、ただ愚直に何かを目指しているときです。ブザマなセルジュ選手は最高の男です。

記録／13時間34分

●7月25日　ステージ37
距離／61・1キロ

今日もウンコを4回しました。むろんレース中の話であり、むろん野グソの話です。最近は1日4回が定番です。なにもそんなに小分けにして出さなくてもいいじゃないか、と思われるかも知れませんが、小分けじゃなくて大分けです。毎回、大量にやっこさんが排出されるんです。なぜそんなに出るかというと、答えは単純、大量に食べるからです。ぼくたちは一日に約5000キロカロリーを走って消費します。基礎代謝分も足すと6500キロカロリー。理論的にはこれと同量のカロリーを摂取しないとどんどん痩せてしまうのですが、6500キロカロリー分も食えっこありません。そんでもって一カ月で8キログラムも痩せてしまってるわけです。痩せてパワーが失われると走れません。6500は無理でも4000くらいは食べます。もうブタが餌に食らいつくように貪ります。その食べカスが野グソとなってアメリカの土壌を肥沃にするのです。野グソしても1キロあたりのタイムを落とさないよう前後でスパートをかけます。野グソに要する時間は1分以内です。時間短縮するコツは、漏らす寸前まで我慢し、大爆発させることです。大地を割って噴き出すマグマのごとくです。ちなみにヨーロッパの選手は、いわゆる「ウンコ座り」ができません。幼い頃より和式トイレで鍛えられてないためです。あと野グソ姿を見られることへの羞恥心がありません。道端で堂々と中腰で野グソしています。よく内股やシューズに汚物がつかないものだと感心します。

夜は長距離トラックのドライバーが集まるビュッフェ・レストランで食事しました。体重100キロを超す巨漢たちが食事する横で、最も食事量が多いのが痩せ細ったわれわれランナーたちであることに店内の熱い注目が集まりました。ぼくは煮込みスープを7杯おかわりしました。明日も快便に違いありません。

記録／10時間12分

●7月26日　ステージ38
距離／65・9キロ

朝から3度もコケました。段差などない平坦な道でつまづいてコケました。自分の想像以上に足が上がってないんでしょう。大腿部の筋肉が細くなり、脚を持ち上げられなくなっています。筋肉は負荷をかけたのちに休養をとると「超回復」という再生作業を行い頑丈になっていくとされますが、休養のないこのレースでは筋肉は破壊されるばかりです。今後もどんどん細くなっていくんでしょうか。

今日のコースを半分くらい過ぎたとき、セルジュ選手のサポートクルーが青ざめた顔で車から下りてきました。「いくら待ってもセルジュが来ない」と途方に暮れています。セルジュ選手はぼくよりずっと前を走っていました。心配ですが、探しに戻っても仕方ありません。しばらくすると後方から来た車がセルジュ選手が2キロ後ろにいると教えてくれました。やがて追いついてきた彼

に「みんなセルジュさんがいなくなったと大騒動してたよ」と声かけると「ぼーっとしていて本来曲がる道を真っ直ぐ進んでしまったんだ」とはにかんでいます。仮にも主催者の彼が、自分で設定したはずの道を間違うなんて、おもしろすぎでしょう。

並走しながら彼は来年の夢を語ります。「ランニングで地球一周をしたいんだ。パリを出発して中国、日本、インドシナ半島、オーストラリア。そして南米の南端からニューヨークまで行き、アフリカの南端からパリを目指すんだ。18カ月でやるよ」。そう語る彼の表情は、夏休みに洞窟探検を決意した少年のように眩しく無邪気に輝いています。「この男になら抱かれていい…」素直にそう思えました。

話はホモつながりですが、諸事情あって先日よりフィリップ選手が日本チームに加わりました。彼はよく高級アイスクリームをぼくにくれるホモ疑惑のあるフランス男です。今夜ホテルのツインルームでぼくと同室です。つーかブリーフいっちょう、ほぼ全裸の彼が今ぼくの横にいて、この日記を打つ携帯の画面を覗きこんだりして微笑んでいます。今夜ぼくは大丈夫なんでしょうか？

記録／11時間17分

●7月27日　ステージ39
距離／78.5キロ

オクラホマ州の境界を越えカンザス州の旅がはじまりました。朝から40キロくらい走り、ジョプリンという街にさしかかりました。最初はやたらゴミの多い街だなと不快に感じました。住宅街の半数以上が空き家で、ボロボロの家具や家財道具が家の前に野積みされています。ここはスラム街なのか？　街を美しく維持することが病的なまでに好きなアメリカ人なのに…なんて考えながら走っているぼくの目の前に、突然それは現れました。ぼくの立っている交差点から向こうの街が「ない！」。恐ろしい光景が広がっています。あらゆる家が破壊されガレキが散乱しています。木々は幹の途中でもぎとられ、根本から折れた電柱が横たわっています。そこが確かにかつて街であったことは容易に想像できます。こなごなに吹き飛ばされた巨大コンベンションセンター。その広い駐車場が被災者への対応基地になっています。

竜巻がこの街を襲ったのは二カ月前だそうです。竜巻の傷跡として想像しがちな蛇行する線上の被害ではなく、少なくとも5キロ四方の市街地がまるまる吹き飛ばされています。

あちこちで復興工事が始まっていますが、被害エリアの大半が手付かずで放置されています。砂埃が舞い、住宅建材やゴミが散乱する道を、ただ早足で歩きました。こんな所でレースなどしてる場合じゃないと思い、目を伏せて歩きました。3時間ほどで被災地域を過ぎると、何事もなかったかのように、緑の美しい街に変わりました。あのガレキの街もこうだったんでしょう。レースのことはあまり考えられない一日でした。明日の朝、地元の方がわれわれの宿泊所に状況説明に来られ、募金を募るそうです。

記録／13時間08分

●7月28日　ステージ40
距離／84.5キロ

朝、主催者ロールさんよりランナーに対するペナルティが課されました。道路の傾斜を嫌い蛇行走行していた選手に対し、危険行為として一週間の出場停止が下されました。厳しい判断に思えますが、当大会は交通事故防止を徹底し、ルールを厳格に、違反者へのペナルティも明確にされています。主催者の決定に不服があれば選手会として意見をまとめ反論もできます。ルールやコースの変更などの最終意思決定は、ランキングに残っている8人の選手の意思で承認・決定されます。このようなデモクラシーが徹底されているのは、文化背景や言語の異なる人たちが集まった大会では欠かせないものです。主催者と選手間にはほどよい緊張関係があり、違いに不満を述べ、意見の擦りあわせが行われます。意思決定は非常に速いです。組織運営の勉強にすごくなっています。

今日は85キロの長いコース。アスファルトが溶解する暑さは相変わらずです。3・2キロ（2マイル）ごとにサポートクルーが用意してくれたエイドで飲み物、食べ物を大量に摂取します。特に水をはじめとする飲料は、自分でも信じられないくらいの量を喉に流しこみます。各エイドでは300〜500㎖を5秒程度で一気に飲み、エイドで手渡された水を次のエイドまでに走りながら300〜500㎖飲みます。合わせて600㎖〜1リットルを1エイド間で飲みます。たとえば85キロある今日のコースなら26回エイドがあり、掛け算するとレース中に15リッター以上の飲み物を採っています。子供一人分の体重くらいです。にわかには信じがたい量ですがホントです。

夕暮れどきにゴールすると、ボウルいっぱいの美味しいスイカが待っていました。手づかみでむさぼり食っているとロールさんが寄ってきて「あと30日でニューヨークだけど、あなたは今どんな気分？」と聞くので「前は早く終わりたい、しか考えられなかったけど、この頃は終わりの日を想像すると淋しい気分になります。ゴールの3日前になればゴールなんてしたくないって叫ぶかもしれない」と答えました。するとロールさんが「じゃあいいアイデアがあるわ。ニューヨークに着いたらロサンゼルスに引き返すのよ！　NY・LAフットレース2011を企画するわ！」と盛り上がっているので、スイカを持ったまま逃げだしました。

記録／14時間21分

●7月29日　ステージ41
距離／77.1キロ

この大会は「オールド66」と呼ばれる旧ハイウェイ66号線をコースの多くに採用しています。街道沿いには家具や服などのアンティークショップや「66」グッズの店、最終的には商品だかゴミだかわからないような骨董品を売っています。ここには、アメリカ懐古派というか20世紀中盤のカントリーポップのヒットランキングがそのまま全米チャートだった時代そのままの生活様式を営んでいる人が少なからずいます。彼らは時間が過ぎるのをゆっくり愉しんでいるように見えます。大会の噂を聞きつけ私設エイドを出してくれたりして、選手に興味津々な対応をしてくれます。ルート66はLAからシカゴまでの弾丸ルートだったので、ぼくたちはあとしばらくこの懐古派たちが夢うつつに暮らす街々を楽しめそうです。

ワールドツアーを計画中のセルジュ選手に、四国遍路が培った沿道の文化について説明しているとすごく興味を持ってくれました。セルジュ・ジラールが四国を走る絵柄を想像すると大興奮です（ぼくだけ）。ぜひ来てくれないかな。

走りながらアイスクリームを買うことを覚えました。てか、自分では買ってなくて他の選手におごってもらってます。明日からは小銭を持ち自腹で買い食いしたいと思います。ちなみにぼく同様甘党のジェームス選手（英国）は、マクドナルドが現れるたびにバニラミルク味のシェイクを買っています。

右脚のスネを傷めました。40日目を経てはじめて右脚の故障です。今までよく耐えてくれました。左脚は下から足首、アキレス腱、ふくらはぎ、膝、大腿と、すべて故障してきました。この左脚くんを支えてきてくれたのが頑丈な右脚くんです。右脚くん今までホントにありがとう。明日からは劣等生だった左脚くんが君を支えるよ。

記録／12時間14分

●7月30日　ステージ42
距離／83.1キロ

朝から足が軽く快調に飛ばしました。午前中にはロサンゼルスから3000キロ地点を越えました。今日は久々に上位に食い込めるなと気分よく走っていると、快晴だった空を、ものの一時間で真っ黒い雨雲が覆い尽くしました。稲妻が地上へと光の筋を走らせ、その先では巨木が真っ二つに裂けるような音がします。あるいは爆弾が落ちたような衝撃音が鳴り響きます。小犬がひっくり返り、鳥が地面に落ちてくるほどの横殴りの風、そしてシャワー全開レベルの雨。まさに嵐です。それでも雨宿りせず走りつづけました。嵐は一時間くらいで収まりましたが、雨雲が去っても未舗装道には濁流が残っています。

雨に濡れた服で走り擦れたのか、股ズレの症状が出ました。まったく（ため息）3000キロも走って何ともなかったのになぜ今頃？と腹立ちます。股ズレは馬鹿にできません。ひどい場合は皮膚を失い生肉が露出した状態、つまりひどい火傷のようになり、走るのが困難になります。ワセリンをたっぷり塗りましたが、悪化しないことを祈りたい。レースはそのまま頑張って5位に食い込みました。ホテルに入りバスタブに横たわると全身に紅い湿疹ができていました。何か食べ物が悪かったんだろうか。明日までに治ればいいけど。

記録／13時間16分

●7月31日　ステージ43
距離／66.5キロ

まさか今日、完走が途切れる寸前の深刻な事態に陥るとは想像もしていませんでした。コースは66キロと短距離であり、80キロ以上が続いた数日の疲労を抜く日だとランナーはみな考えている軽い日のはずなんです。

十数キロ走った頃に異変に気づきました。今朝いったん消えたはずの紅い湿疹が、脚に腹に顔にと全身に現れています。それから2時間ほどで、正常な皮膚が見えなくなるほど広がりました。厄介なのは股間です。脚を前に繰り出すたびに、湿疹を発症した皮膚とウエアが擦れ、激しい痛みに変わっていきます。中間点を過ぎる頃には、燃え盛った焼印を押し当てられる激烈な痛みになりました。いわゆる股ズレというヤツとは違います。内腿には紅い湿疹の塊が30センチ以上の幅で皮膚を厚く盛り上げ、象皮病のような模様を刻んでいます。数百の突起が合体したもので、ひとつひとつが神経の痛点をむきだしにしたかのごとく。触ると痛みで気が遠くなります。皮膚表面はひどく熱を持ち、体温を上昇させ、頭痛と吐き気を呼び起こします。もはや走りたくても走れません。後半30キロを歩き通しました。制限時間まで10分を切るスレスレのゴールでした。

ゴールしてから風呂場に直行しました。水風呂に浸かっているのに皮膚は熱い。内股の皮膚はモンスターのようです。見ているだけで気持ち悪くなり、風呂からはい出てベッドに横になっていると、半死にのぼくより更にゴールが遅かったフィリップ選手（フランス）が、アタッシュケースくらいある巨大なプラスチックケースを持って現れました。彼がおもむろにケースを開くと中には50種類以上の薬が詰め込まれています。そうです。お調子者でオカマっぽいフィリップですが、母国フランスでは大きな薬局チェーンの経営者なのです。彼はぼくの股間をしげしげと見つめた後、ケースから飲み薬と塗り薬を出し提供してくれました。ああ、この薬が効きますように。明日のスタートラインに立てるかどうかはオカマのフィリップに委ねられた！

記録／11時間35分

●8月1日　ステージ44
距離／46.8キロ

朝起きたら大半の湿疹が消えていました。フランスの薬局王フィリップ選手がくれた謎の薬が効いたのです！　すごい効き目！　ところが走り始めてみると、普通ではない精神状態に混乱がはじまります。まったくやる気が起こらないんです。やる気どころか、正反対の「やらない気」が異常に強い。木陰に居心地よさそうなベンチが置かれてるのを見かけると「あそこで昼過ぎまでうたた寝して、今日で失格になってやろうかコノヤロー」牧場で乳牛がのんびり草をはんでいる姿を見て「今から牛の世話でもして牧場主と友達になり、夕方まで忙しくなって走るどころじゃなくしてやろうか！」とにかく、やる気のない行動への強烈な指向が脳を支配して拭い去れません。薬局王フィリップ、いったいぼくに何の薬を盛ったのか！

しかし人間の意識なんて、薬物ひとつでこんな簡単にコントロールされちゃうのかよ。おもしろいけどね。その後、真夏日和にガーガー汗を流したら、次第に薬物の影響も薄れていき、ゴールする頃にはまっとうな人物に戻っていました。

今日から8月に入りました。6月中旬に始まったこのレースも最後の月に突入したわけです。ぼちぼちニューヨークへの完走の確信も掴めそうなもんですが、そうは問屋が卸しません。8月、行程はゴールが近づくほどに厳しさを増し、80キロ台、90キロ台が連続する地獄のシリーズが始まります。最後の最後まで完走を阻むサディスティックなコース設定がこの大会の特徴です。よおし、受けて立ってやろうじゃないの。厳しけりゃ厳しいほど、得る物は多いってもんだ。ぐちゃぐちゃにしてみやがれ。どんと来いコノヤロー！…って寝る前にして、異常にやる気が出てきました。はたしてこれは、本来のぼくに由来したやる気なのか、あるいは薬局王フィリップの薬物の副作用の再反動か。なんか相当怪しくてややこしいね。

記録／7時間47分

●8月2日　ステージ45
距離／48.1キロ

朝起きると吐き気がして胃の中の物をぜんぶ吐瀉戻しました。まったく何なんだ？　いつまで虚弱体質かよ。少しは環境に慣れろっつーの！

自分にイライラして走りだせばゲロ吐きなど嘘のように脚が軽い。走る前は「今日は500メートルも走れん」と思っていても、いざ走れば平気。そんな経験を何度もしました。いったい疲労感とか体調不良って何だろね。ほとんどが精神状態の影響下にある気がします。

そういえば全身に現れた紅い湿疹ですが、ランナーのうち少なくとも6人に同様の症状が出ています。3日前の嵐に打たれてからです。あの嵐は何を運んできたのだろう。ちょっとしたミステリーです。スティーブン・キングの小説みたいね。モダンホラーの巨匠キングの物語にはよくトウモロコシ畑が登場するんだけど、日本で本読んででもピンと来なかったけど、アメリカ走ってわかった。その場所こそがアメリカのリアリティなんね。日本でいう田んぼに揺れる人魂の世界観なんです。どこにでもあって、昼は明るく、夜は影に覆われている。ザワザワ揺れる奥中に何かが潜んでいる…万人が恐怖を感じる家の隣の世界。紅い湿疹が、ぼくたちが怪物に化ける前兆でないことを祈ります。

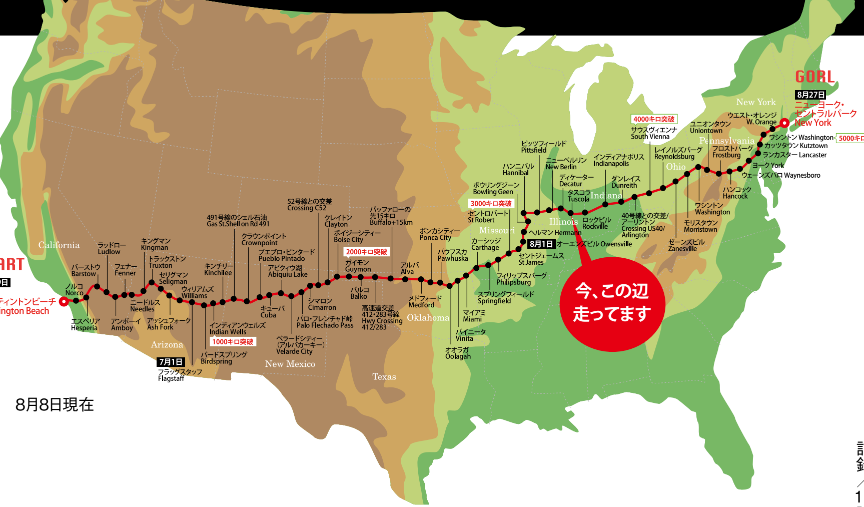
で、快調に走りつづけました。

マルカス選手（ドイツ）はオーストラリア大陸横断レースの完走者であり、ぼくなど足元に及ばぬ実力者なのですが、当レースでは序盤に体調を崩しリタイアを余儀なくされました。それでもランキング外で懸命にレースを続ける姿勢に心打たれます。今日は彼に質問を受け、ぼくのアフリカ徒歩横断の体験をずいぶん長時間話しながら走りました。ハイペースな彼に並走して話すのは大変でしたが、すごく楽しかったです。日本では誰からも質問されたり、興味を持たれない冒険紀行だけど、ここでは興味津々、目を輝かせて聞いてくる連中がいます。同じ次元で難易度や攻略方法、体験談を話し合えるのは嬉しいです。

あっという間に今日のレースは終わり、明日から続く地獄の25連戦に備え昼から安宿で寝ています。

こっちのテレビでは地上波でWWE（プロレス）やUFC（総合格闘技）が毎日観られます。派手な演出、ドラマチックな物語と煽り映像、レベルの高い攻防…それに比べて日本のプロレス界の凋落ぶりはどうだ。いい選手はいるのに仕掛け人が不在なんです。遠い国のリングの復興を夢見ながら、浅い眠りに誘われます。

記録／6時間24分


START
6月19日
ロス・ハンティントンビーチ
Huntington Beach
ノルコ Norco
エスペリア Hesperia
バーストウ Barstow
ラッドロー Ludlow
アンボーイ Amboy
フェナー Fenner
ニードルス Needles
キングマン Kingman
トラックストン Truxton
セリグマン Seligman
アッシュフォーク Ash Fork
ウィリアムズ Williams
7月1日
フラッグスタッフ Flagstaff
1000キロ突破
インディアンウェルズ Indian Wells
バードスプリング Birdspring
キンチリー Kinchilee
491号線のシェル石油 Gas St.Shell on Rd 491
クラウンポイント Crownpoint
プエブロ・ピンタード Pueblo Pintado
アビクイウ湖 Abiquiu Lake
キューバ Cuba
シマロン Cimarron
パロ・フレンチャド峠 Palo Flechado Pass
ベラードシティー（アルバカーキー） Velarde City
52号線との交差 Crossing C52
クレイトン Clayton
ボイジーシティー Boise City
2000キロ突破
ガイモン Guymon
バルコ Balko
バッファローの先15キロ Buffalo+15km
アルバ Alva
高速道交差 412・283号線 Hwy Crossing 412/283
メドフォード Medford
ポンカシティー Ponca City
パウフスカ Pawhuska
カーシッジ Carthage
オオラガ Oolagah
バイニータ Vinita
マイアミ Miami
スプリングフィールド Springfield
フィリップスバーグ Philipsburg
セントジェームス St James
8月1日
オーエンズビル Owensville
ヘルマン Hermann
セントロバート St Robert
3000キロ突破
ボウリングジーン Bowling Geen
ハンニバル Hannibal
ピッツフィールド Pittsfield
ニューベルリン New Berlin
ディケーター Decatur
タスコラ Tuscola
ロックビル Rockville
インディアナポリス Indianapolis
ダンレイス Dunreith
40号線との交差/アーリントン Crossing US40/ Arlington
レイノルズバーグ Reynoldsburg
ゼーンズビル Zanesville
モリスタウン Morristown
ワシントン Washington
ハンコック Hancock
ウェーンズバロ Waynesboro
ヨーク York
ランカスター Lancaster
カッツタウン Kutztown
ワシントン Washington
5000キロ突破
フロストバーグ Frostburg
4000キロ突破
サウスヴィエンナ South Vienna
ユニオンタウン Uniontown
ウエスト・オレンジ W. Orange
GOAL
8月27日
ニューヨーク・セントラルパーク New York
California
Arizona
New Mexico
Texas
Oklahoma
Missouri
Illinois
Indiana
Ohio
Pennsylvania
New York
今、この辺走ってます

8月8日現在

●8月3日　ステージ46
距離／88.4キロ

大会開始以来、2番目に長い距離。今日も生き残りました。しかし、もうへとへと。ゴールしてホテルの部屋に倒れ込み、ベッドに横たわれば、ぴくりとも動けません。足の裏は饅頭をくっつけたように腫れあがり、ジンジン焼けるように熱いです。

シューズの状態がとても悪いです。そもそもぼくの補修の仕方に問題があります。ミッドソールと呼ばれる靴底の軟らかい部分、衝撃吸収してくれる所をすべて擦り減らし無くしてから、タイヤの切れ端を貼っつけてたんです。タイヤ材は高さをかさ上げはしますが、材質としては非常に硬質なんです。これでは、靴底の硬いビジネス革靴を履いて80キロ走っているようなもんです。

多くのランナーは10足から20足のシューズを大会用に持参しています。底が擦り減れば即新品に交換。ぼくはたったの3足。そして3足とも既に靴底の軟らかい部分はなし。タイヤの補修もヘタクソで、時にハイヒールを履いてるような不安定。ナイフで削ったり、ヤスリで磨いたり。チクショー！　走りにくいよー。

記録／14時間09分

●8月4日　ステージ47
距離／72.4キロ

朝起きると必ず鼻をかみます。大会2日目から45日間続けて出ている鼻血が、朝には2センチ大の血栓となって鼻の穴を完全封鎖するからです。今朝も鼻血の塊を出そうと思いっきり鼻をかむと、鼻腔にひっかかる物なく鼻息が空振りしました。45日ぶりに鼻血が止まったんです。ついに自然環境に順応する日が来たのかな。今ごろ遅すぎ？

朝から調子よく飛ばしていましたが、20キロ過ぎに右脚のスネがズキズキ痛みはじめ、30キロあたりで走行困難な強い痛みになりました。氷をあてがい、強い鎮痛剤を使用限度を無視して飲みましたが、脳天まで突き抜ける痛みは変わりません。骨にヒビが入ったのかと疑うほどです。

怪我した右脚以外を総動員して前進します。左脚で踏ん張ります。腕を振ります。10メートル走っては痛みで止まり、歩きで繋ぎながら、次の走る準備をします。10メートル走り、10メートル歩く。気が遠くなるくらい同じことを繰り返しました。

ゴールにたどり着けば、もはや10センチの段差も越えられない痛み、筋肉疲労。走っても走っても、ぼくは強くなれません。大会初日を除いてまともに走れたことなど一度もありません。

「数千キロを走る大陸横断レースでは、速いランナーが完走できるとは限らない。最後まで走り続けられたランナーこそが結果として強いランナーに成長してるんだ」と大会開始前にベテランランナーの方が教えてくれました。確かに生き残っている選手たちは精神力も肉体の強さも走力も凄いです。それに比べてぼくは、怪我をしてない時はなく、心はもろく、秀でた走力もありません。5000キロも走るんだから、最後の方になると凄く強いランナーになってるかもな、なんて淡い期待を抱いてましたが、まったく逆です。もはや走ることすらままならない身体になっています。明日、ぼくはスタートできるんだろうか。

記録／12時間08分

●8月5日　ステージ48
距離／76.0キロ

朝起きたら右脚の痛みが消えている…という淡い期待は叶いませんでした。状態は昨日より悪く、ホテルの階段をなかなか降りることができません。ロクに歩くこともできない人間が、今から数分後から何十キロも走れるんだろうか？

スタートの合図の後、当たり前のようにすべてのランナーが走り去ってしまい、走れないぼくは一人取り残されました。必死に歩きました。歩くだけでは制限時間に間に合いませんが、他に方法が見当たらないので歩きます。暗闇を、ヘッドランプの明かりを頼りに、息が切れるまで必死に歩きます。

雨が降りだしました。朝から雲が出るのは珍しく、ましてや雨が降るのは初めてです。本降りが3時間も続きました。傷めた患部が冷やされ、少し痛みが引いてきました。峠道の登り坂に差しかかる頃、ひょこひょこ走れるようになってきました。何か大きな力を感じざるを得ません。今回の大会では、もうダメだってときに、何度も偶然や自然現象によって救われています。だからって神様仏様の存在を感じるほどの感受性はありません。ただ「まぐれにしてはできすぎている」という出来事が多いなと感じてます。

ヨロヨロ走ってるぼくを大会スタッフが見つけると、車で併走しながら「ニューヨークに行こう！　君にはニューヨークが見えてるだろ！　走れ！　行けBANDO！」と励ましてくれます。でも今のぼくにはニューヨークは見えません。明日どころか今日、どこまで走れるのかもわかりません。10キロ先まで進めているのかすらです。

本当に本当に疲れきってゴールしました。痛みは右足首まで拡がり、90度のまま動かすことができません。伸ばしても曲げても激痛です。最悪と思っていた今朝よりはるかに悪化しています。ますます明日が見えなくなっています。

記録／13時間02分

●8月6日　ステージ49
距離／68.3キロ

今までの怪我は、最初ガツンときて、毎日10パーセントずつ回復していく感じでした。今度の右脚スネの故障は、毎日悪化し続けています。この行き着く先が怖いです。なんで50日近く走って今更こんな怪我…と苛立ちます。痛みはすべての精神活動を停止させます。朝3時50分に目覚ましが鳴り起きると、90度のまま動かない足首にがっかりします。スタートラインにつくまでの数十メートルの移動に冷や汗を流します。手摺りがないと階段は昇降できません。

朝5時にレースが始まり夕方ゴールするまでの十数時間、感情の90パーセントは「痛い」に支配されています。逃れられない痛みに心が鬱屈し、この状況から逃れたいという弱い気持ちが噴出します。「リタイアを宣言して車で搬送してもらい、ホテルのベッドで一日中寝てられたらどれだけ気持ちいいだろう」と何度も思います。

今日も積極的にレースを組み立てる余裕もなく、ただただ制限時間にギリギリ間に合うペースを守ることだけを求め、走ってるんだか歩いてるんだかわからない奇妙なフォームで、果てのないイバラの道を行きました。1キロを10分で進めば何とか制限時間に間に合いますが、キロ10分を維持できません。息を切らし、顔を歪め、脂汗をじっとり滲ませ、必死に食い下がります。失格時間の9分前にゴールすると、もう一歩も歩きたくなく、その場に崩れ落ちました。

記録／11時間52分

●8月7日　ステージ50
距離／87.4キロ

87キロという距離を、いったい全体どうやって壊れた脚で走り切れるというのでしょうか。完全に追い込まれました。今日でぼくのレースが終わるなら、せめて攻めに攻めて終わりたい。破れかぶれでも前を向いて走りたい。怪我を気にして下をうつむいたままの恰好で、ぼくのレースに終止符を打ちたくない。

不意にある場面が脳裏に浮かびます。「五体不満足」の著者、乙武君があるプロ野球の試合の始球式をする映像です。彼はリリーフカーに乗らず、ベンチから猛ダッシュでマウンドに向かいます。彼がこんなスピードで走れるなんて、という驚きと、四肢の欠けた彼に対して「わーすげー」と素直に驚きを表現できない複雑な気持ち。それから彼はちゃんとグラブをはめ、硬式ボールを首と肩にはさみ、彼が考案したらしいピッチングフォームで、バッターの近くまで球をちゃんと投げ、また走って帰ったのだった。記憶は曖昧なんだけど、その映像を見た時の気持ちは「恰好つけやがって」でした。ハンデキャップを逆手にとって誰がどう見ても圧倒されることをサクッとやりやがって。カッコイイね。

今走りながらぼくは、乙武君の百分の一の努力もしてないことに気づきます。脚がいくら痛いといっても、立ち上がれないほどではないし、足首が曲げられなくても、走るのに障害になるほどじゃない。

何かあるはずだ。何が方法があるんだ。

それからいろんな試みをしました。ある特定の足首の角度で、ある脚の踏み出し方をすれば、痛みが少ないことに気づきました。現在、故障の少ない左脚のキックをロスなく推進力に変える方法も見つけました。しかしたったこの程度のことです。ヒントをくれた乙武君に深々とこうべを垂れたいです。

そして、どんな状況でも、笑って前に進むためにここに来たことを思いだしました。人間の身体とは不思議なものです。前向きに克服しようとすれば、「そうか。治したいなら、治してやる」というエネルギーが患部に集まり、腫れ、熱を持ち、膿を出しながら自己治療に入る気がします。痛さが度を過ぎて麻痺しているのかどうかわかりませんが、ラスト30キロは久しぶりに痛みから開放され、走れました。

ゴールした直後、主催者ロールさんやセルジュ選手に怪我の具合を聞かれ「人間の身体は不思議です。あんなに痛かったのがランニングを続けていたら治りました！」と満面の笑顔で説明し、さて椅子から立とうとすると、自力で立てません。激痛をカバーするため必死に走り続けた全筋肉がいっせいに休養に入った模様です。まったく人体ってどんな仕組みでできてるんでしょか。

記録／14時間50分

●8月8日　ステージ51
距離／67.3キロ

大会ナンバーワン選手であるライナー（ドイツ）様が、ぼくの怪我を気遣かって話し掛けてくれました。「きっと典型的なシンスプリントですよ。骨折まではまだいかないでしょう。少なくとも3日間は痛みが酷くなり続けますが耐えてください。走っている時以外は胴体より脚を高く上げるように横になり、氷で冷やし続けること。大丈夫です。1回克服すれば次はなかなかなりません。強くなります。何といっても、ぼくたちはニューヨークに行かなくちゃね」

ぼくよりずいぶん歳下なのに、まるで師のような上下関係です。本職が工学系エンジニアである彼は、ぼくの知るかぎり4カ国語を流暢に話し、論理的で冷静で民主的な姿勢の持ち主です。そして各大陸の横断レースをぶっちぎりで勝ち続けています。以前、ふだんはどんな練習しているのか尋ねたことがあります。すると「平日は走りません。長距離を走るのは、まとめた時間のとれる週末の休日だけです」と言うので、何キロくらい？と問うと「200キロくらいです」との返事。こりゃ勝てんて！

今日は左脚のスネ、足底筋、膝を傷めました。今まで怪我してなかったパーツが、反乱を起こしだしています。「今まで黙って耐えに耐えて来たが、これ以上われらを酷使するなら、全部位が蜂起して、城主殿に痛みという地獄を味わわせてやる！」とシュプレヒコールを挙げはじめたようです。かといって謀反に対して打てる手立てもなく、明日今大会最長の92キロを迎えます。毎日が正念場なんだけど本当にギリギリの勝負です。これを乗り越えたら、きっと何かがあるはずなんだ、そこには。

記録／11時間42分

（つづく）